

JKA 補助事業 国際交流成果報告書

氏名：樋口 瑠洸

所属機関：大阪大学 大学院工学研究科

2026 年 8 月 30 日から 9 月 3 日にかけて、スペイン・サンセバスチャンで開催された「36th International Conference on Diamond and Carbon Materials (ICDCM)」に参加し、口頭での研究成果発表、ならびに情報収集を行った。本会議は、ダイヤモンドや炭素材料に関する研究者が世界各国から参加する国際会議であり、補助対象者（以下、対象者）が現在行っている材料分野に特化した国際会議である。

今回の参加にあたり、対象者は二つの目標を設定した。一つ目は、口頭発表を通して国内外の研究者から自身の研究に対する意見や助言をいただき、専門的な議論を行うことである。二つ目は、自身の研究分野で第一線に立つ研究者と積極的に交流し人脈を広げ、研究に関する知見を広げることである。

一つ目の目標については、口頭発表の質疑応答において、ドイツから参加されていた Matthias Schreck 教授から貴重なご意見をいただくことができた。対象者のダイヤモンド形成技術に対する客観的な指摘を賜り、今後の研究を発展させるうえで重要な課題と研究指針のヒントを得ることができた。また、発表セッション終了後、Dr. John Isaac Enriquez から研究について深い議論をしたいとの依頼があり、有意義な意見交換を行うことができた。以上の研究に関する議論を通じて得た知見は、今後の実験、考察、さらには投稿論文に反映させることで、研究の質を高めるのに貢献する大きな成果であった。一方、今回の国際会議を通じ、対象者の英語能力については、さらに高める必要がある。発表、質疑応答、さらに研究者間の自由な議論において、相手の意見を迅速かつ正確に理解し、自分の考えを十分に伝えるためには、より生きた英語能力を身につける必要がある。この点については、発表セッションの座長の先生から対象者が貴重な助言をいただくことができ、国内では得ることができない大きな糧となった。この体験をもとに、研究知識だけでなく、生きた議論のできる英語力を磨くことへの強い自覚を芽生えさせることに成功した。

二つ目の目標については、極めて多くの専門分野を同じくする研究者と交流する機会が得られた。本会議ではポスターセッションが 2 時間ずつ二日間開催され、107 件の発表が行われた。対象者もポスターセッションを通じて、積極的に聴講と質疑に加わり、オーストラリア、ポルトガル、韓国など、さまざまな地域から参加した研究者と交流することができた。



図 1. 会場の様子(a)と 36th ICDCM の参加記録

特に、オーストラリアから参加していた博士課程の学生とは会議期間中に何度も交流する機会があり、海外の博士課程学生の研究生活や将来のキャリアについて直接話を聞く機会が得られた。とりわけ、博士課程在学中から、研究活動に加えて起業にも積極的に取り組む研究者が多数おり、その姿勢や行動力に対して多くの刺激が得られた。加えて、海外の研究者のみならず我が国から参加された先生方とも交流を深めた。国内の大学教員、企業研究者、国立研究機関の研究者の方々と名刺交換などを行い、研究内容や今後の研究活動について情報交換をする機会を得た。今回の交流による名刺交換は9枚であり、さらに今後の研究交流をリマインドしてもらうため、対象者が名刺をお渡しした枚数を含めると18枚に達した。また、今回交流した先生方の多くは、11月に北九州で開催されるダイヤモンド関連会議にも参加予定であり、対象者も参加予定のため、今回の人的交流を今後も継続し、さらに深い情報交換、さらには共同研究などへ発展させる契機となることを期待している。

ICDCMは、参加者の多くがダイヤモンドや炭素材料に特化しており、まさしくダイヤモンド関連の中核となる会議であった。そのため、対象者の研究に対して鋭い質問や具体的な実験方法などについて意見をいただくことができ、対象者の研究を客観的に評価する貴重な機会となった。さらに、周囲の先生方から学生である対象者を激励する言葉を沢山いただき、今後の研究活動に取り組むうえで大きな刺激と活力を得ることができた。また、海外の研究者や博士課程学生との交流を通じて、自身の研究や将来のキャリアを改めて考えるきっかけにもなった。

最後に、今回対象者のICDCMへの参加に際して、国際交流助成を通して、貴重な機会をいただいた、公益財団法人JKAに心より感謝申し上げる。今回、貴財団のご支援をいただけたことで、研究者を志している対象者が、当該国際会議に参加することができ、上記に記したように、研究上ならびに研究者としての生き方に関する数多くの知見と成果を得ることができた。特に、現地でのフェイス to フェイスでしか得られない研究者間の交流は、対象者自身の今後の研究活動に対して、大きな貢献をするものと期待される。このため、今回の派遣は、当該研究の発展、ならびに対象者の研究者として成長する上で、極めて貴重な機会となった。

今回の国際会議で得た最新の知識、発表の経験、さらには研究者間交流を、今後の対象者の研究活動に積極的に反映し、より質の高い研究成果を生み出すことで、研究を通じた社会貢献につなげる所存である。改めて、貴財団の助成に対して深い感謝の意をここに表して、報告を終わる。



図2. 現地での記録（左：会議場周囲の風景、右：国際会議で交流のあった先生方との会食の様子）